

2011年度リーフレット アンケートから

2011年度のリーフレットに対して、アンケートを通じて様々な意見をいただきました。皆様のご意見をもとに、より分かりやすく、より活用しやすいリーフレット作りを目指していきます。

今まで「偏見なんてしてない。自分には関係ない」と考える自分がいたが、やはりどこかで偏った考え方をしている自分があることに、今回のリーフレットを見て気がつくことができた。

園でどのように実施すればよいのか難しかった。

知らないのではなく知ろうとすること。ハードルを豊かさに変えること。違いがあることが当たり前であるという感覚を身につけていきたいと思えます。

「本当の居場所づくり」ということで考えていきたいが、なかなかどうしたらいいのかわからないため、今後園でも考えていきたいと思う。



多文化共生に関わる4年間の取り組みを終えて

多文化共生に関わる取り組みは、今年で4年目を迎えました。今年の取り組みを起承転結の結の年と位置づけました。そして、この結の年、私たちは今まで学んできたことをもとに実践を行い、実践とともに振り返るということを行いました。

この取り組みは、多文化共生の取り組みを「自分のこととする」ことになりました。外国籍の子どもや、異なったルーツを持つ子どもに対してだけ、多文化共生保育が必要になるものではありません。多文化共生の取り組みの中で見だしてきた人と人之間にある「ハードル」や、子どもたちが居心地よいと感じる「居場所」という視点は、すべての子どもたちと関わっていくにあたって重要な視点だということが、実践を行い、振り返ることで確認されました。

しかし、「ハードル」があり、「居場所」を必要としているのは子どもたちだけではありません。職員間にも「ハードル」はあるのであり、保育所(園)が、保育者一人ひとりにとって心地よい「居場所」である必要があります。

プロジェクトのメンバーたちが実践を持ち寄り、互いに検討し合うことにより、本音で話し合える同僚の存在の重要性に気づきました。保育者自らが心地よいと感じる「居場所」作りが、どんな子どもにとっても心地のよい「居場所」作りへとつながっていくのではないのでしょうか。

鈴鹿短期大学 長澤 貴

このリーフレットのバックナンバーは、公益社団法人 三重県人権教育研究協議会のホームページからダウンロードできます。

<http://www2.ocn.ne.jp/~sandokyo/>

- ▶ 2006年度 / 「節分・雛祭りを人権保育の視点で考える(中間報告)」
- ▶ 2007年度 / 「節分・雛祭りを人権保育の視点で考える(最終報告)」
- ▶ 2008年度 / 「いじめ対応の根っこにあるものは？」
- ▶ 2009年度 / 「多文化共生から人権保育を考える①」
- ▶ 2010年度 / 「多文化共生から人権保育を考える②」
- ▶ 2011年度 / 「多文化共生から人権保育を考える③」

三重県人権保育推進支援事業

2013年3月 発行
三重県健康福祉部
子ども・家庭局 子育て支援課



再生紙を使用しています。植物油インキを使用しています。

多文化共生から 人権保育を考える 4

今年度のプロジェクトは「多文化共生から人権保育を考える」の4年目となりました。この4年間の取り組みをここに紹介します。

2009年度 共に生きるとは

～多文化共生保育交流会の開催～

- 自尊感情を育てる。「その子らしさ」を育てる。
- 「ちがいを認め合い、尊重し合う。
- 「多文化」に限らず、全ての保育所(園)の課題である。



2010年度 私たちができること 見ようとしなないと見えないこと

～多文化共生保育実践園(所)を訪問する中で見えてきたこと～

- 子どもの健康を守る役割を担う。
- 全ての人々が安心できるように。
- 「ちがいは困ったことではなく、「豊か」なことである。
- マイノリティ(少数派)の問題を自分のこととして捉える。
- 保育に携わる全ての人々が共通の意識ですすめる。



2011年度 学びなおし

～施設を訪問、交流する中で、凝り固まった考えを捨てる。ほぐす～

- 「目の前のハードル」とは。
- 本当の「支援」「居場所づくり」とは。

2012年度 人権保育に答えはない(保育者の数だけ人権保育はある)

3年間取り組んできた中で、人権保育とは、共にすすめる仲間と、絶えず模索、思考し続けることであるという、ひとつの答えを得ました。そのために私たちは職場の中で...

ありのままの自分を出せていますか？

何でも話せる関係が出来ていますか？

わかったつもりのよそごとが、本当に自分のことになっているのでしょうか？



これらを自分に問うたとき、やはり私たちは、目の前の子どもの姿にこだわることで、見えてくるものがあるのではないのでしょうか。

ハッと思ったエピソード

今まで学んだことを踏まえて実践したことを出し合い、話し合いました。

これまでの学びを実践に活かそうと、持ち寄ったエピソードの検討を重ねてきました。そして、自分と子ども、保護者、職員間と色々な関係の中で、自分がどう考え、行動しているのかを振り返り、見つめなおすことができました。

私たち保育者は、子どもの居場所をつくりたい、支援をしたいと思い関わってきました。しかし、子どもに対して「ちがいを認める」とことばで伝えながらも、本当は違うくない方がやりやすいと感じたり、保育者自身が周りや違うことを不安に思ったりしながら保育をしているのではないかと、ということに気がきました。

このような気づきできたのはエピソードの検討を通して、否定されない雰囲気、受け止めてもらえる関係ができ、本音で話し合うことができたからです。子どもはおとなを映す鏡。保育者が成長する園に子どもは育つとも言います。保育所(園)が、保育者にとって安心して自分を出せる場であることが、子どもにとっての本当の居場所作りにつながるのだと思います。

3歳児 日本語の理解が難しいAちゃん

みんなで絵本を見ているところへ登所してきたが表情が硬い。

保:「お部屋に入ろうか」「一緒に座る?」「お友だちいるよ」

A:「・・・」(動かないAちゃん。)

保:「ここ座る?」「どこが空いてるかなあ?」「ここいいよー。おいでー。」

A:「・・・」(立ち止まったまま動かず)

B:「・・・」

(同じクラスのBちゃん。ずっと立ち上がり、Aちゃんにそっと手をだす)

A:「・・・」

(にっこりしてBちゃんと手をつなぎ座る。)

Aちゃんを思ってかかわっているけれど、Aちゃんの求めていたもの、困っていたことって本当は・・・?みんなと一緒に・・・それってAちゃんの思い? 保育者の思い?



Cちゃんの行動のすべてを無意識に「良くない」ってみていたのかな?

「Cちゃんかなん」と感じるのはなぜ?

3歳児 外国籍のCちゃん

家ではスペイン語で話していて、日本語がわからない。Cちゃんは部屋を走り回ったり、自分の思いが通らないうちが手が出てしまう。保育者はCちゃんにとって解りやすいことばで・・・と「ダメ!」と止めてきた。

ある日のこと、ひとりの子どもが保育者に友だち:「Cちゃん かなん・・・」(保育者はハツとした)



保育者のかかわりや言葉かけを周りの子はどうみている?

Cちゃんを「いい子」にすればいいのかな? だれにとって「いい子」なのかな? 「いい子」って何?

Cちゃんの気持ちを本当に理解できているのかな?

Cちゃんにも、周りの子にとってもいいかかわりって?

Aちゃんは何を求めていたのだろうか? ことばじゃなく優しく温かな手だったのかな?

おとなが良かれと思ってしていることと子どもの求めている支援とのズレがある?

3歳児のDちゃん

担任とは違うかかわりができる立場だけど・・・関係づくりって難しい。

言うことを聞いてくれないのは担任じゃないから? Dちゃんを避けてしまったのはなぜ? どうしてそうしてしまうのかな?

友だちとの遊びの中で、友だちのおもちゃが欲しくて無理に取ってしまった。

保:「何も言わんといきなり取ったらアカンよ。」

D:「イヤ!」

フリー保育士の自分が間に入り声をかけるが

Dちゃんは「イヤ!」の一点張りだが担任保育士に言われると「イヤ!」といいつつも話を聞き始める。普段からフリーの保育士である自分の言葉を聞き入れにくいことでDちゃんに対して苦手意識ができ、かかわりを避けてしまっていた。しかし、気持ちを切り替えて少しかかわり方を変えると気持ちがほぐれ、スムーズに受け入れたDちゃんであった。



苦手な子と自分の間に「ハードル」がある。かかわりにくい子に対しては、なるべくかかわろうとしない自分がいる。

日常会話ができてから大丈夫、解っているではない!

Eちゃんにとって、その絵本は解りやすいものだったかな? Eちゃんの行動から見えてくるものは?

3歳児 外国籍のEちゃん

集団生活の経験があり、日常会話は通じる部分がある。絵本の読み聞かせを始めると少しの間は見えていたが、しばらくすると読んでいる保育者の前に来て寝転び始める。

声をかけると「イヤ」と言ってゴロゴロ転がる。保育者の膝の上に座らせるとしばらくは良かったが、そのうちに友だちと膝の取り合いになる。

保育者は何に困っているのかな?



「豊かさ」を共有するために...

聖和保育園を再訪問しました。

聖和保育園では、保育の中でのエピソードを記述し、話し合ったり、互いに意見を書き込んだりしながら園内研修を行っています。

本音でぶつかり合える関係が大切だということで、ありのままの自分を出しても大丈夫なのだという雰囲気づくりに努めて研修を重ねる中で、自分の弱さや嫌な自分も含めて自己開示ができるようになってきたそうです。そうしてぶつかり合い、思いを共有することで、互いが気づかされ、相手によって自分も「豊かさ」をもらっていると感じるのだということでした。

私たちは、外国にルーツはなくても生まれ育った家庭・地域・経験などにより、多かれ少なかれそれぞれ違った文化や習慣を持って生活しています。子ども一人ひとりが違うように、保育者も違います。多文化ともいえる環境の中で、一人ひとりが異なる思いをもつのは自然なことでもあるでしょう。

人権保育に答えはなく、模索し続けることでより良い保育が見出せるなら、自分自身と向き合い、思いを留めずに共有し、豊かな保育を模索していくことができる保育士集団をつくっていくことが大切なのだと思います。



目の前の子どもたちが夢をあきらめないために...

～公益財団法人 三重県国際交流財団との交流会より～

他の国では、高いお金を支払って質の高い教育を受け、安ければそれなりの教育を受けるなど、教育サービスをお金で買う発想も少なくありません。

日本の就学前教育では「生きる力の基礎を育てる」という考え方のもと、当番活動などを通して掃除なども共にします。しかし、保育観のちがいで、保育料を払っているのに、子どもが掃除することに疑問をもったり、罰を与えられているのではないかと誤解されることもあります。そんな葛藤の中で、つけきれなかった力もあるのではないのでしょうか。また、保護者が「いずれは母国に帰るから・・・」と書いていても、実際は子どもは日本に残り、働くことが増えているのが現状です。

保護者になぜこれをするのか、ルールや制度、文化を伝えるだけでなく、ここで生活する子どもの思いを一番に考えていきたいことを伝えましょう。子どもを真ん中において、保護者、園(所)と一緒に考え合うことを大切にしたいですね。

